

箱根駅伝から始まる

文&写真 「中大スポーツ」新聞部 西原沙和記者(法学部2年)

一番のファン



「中大スポーツ」新聞部の1年生は、箱根駅伝の追っかけから始まる。

伝統の東京箱根間大学駅伝競走は、学生スポーツ界の枠を超えて、正月の国民的最大の関心事と言っても過言ではない。中大ランナーの勇姿を撮影するため、新春の寒空の下、中スポ記者は正月返上で活動する。

箱根駅伝の事前報道は『中大スポーツ』ハコネ号」。11月中旬から箱根駅伝につながる主要レースを取材。中大選手にインタビューし、OBや関係者にも話を聞く。

往路の1月2日。中スポは写真撮影班、できあがった『中大スポーツ』ハコネ号』の手配り班に分かれる。手配り班は、早朝、各区間中継所で大きな声を出して中スポを配る。すぐに人だかりができて、新聞はインクの匂いを残して、飛ぶように部員の手を離れていく。箱根駅伝の注目度の高さを改めて実感するときである。

私は前回(第91回)大会、写真撮影班だった。選手が身にまとう伝統のたすき。中スポ記者は心に宿す。

始発で品川駅へ。駅から少し歩い



徳永選手(当時・経3)

て、1区の町澤大雅選手(当時・法2)を撮る。選手たちは、あっという間に通り過ぎていく。シャッターチャンスはその一瞬だけだ。明るさやしぼりの設定を念入りに確認。寒さと緊張からくる手の震えを抑えて、しっかりカメラに収めた。

大磯駅へ急ぐ。スマートフォンのワンセグ機能で順位を確認した。中大が10位までに与えられるシード権圏内を走り続けている。ワクワク感が止まらなかった。大磯駅到着後、20分ほど歩いて、3区—4区の平塚中継所に入った。藤井寛之選手(同・経3)を撮影して、その日の取材を終えた。

往路成績をワンセグで確認する。10位だ。シード権圏内にいる。またワクワクしてきた。

一夜明けた3日。この日も中スポ部員は二手に分かれる。写真撮影班と東京・大手町のゴール地点場所取り班だ。

写真班の私。復路スタート時刻の午前8時前には小田原駅に到着。15分ほど歩くと7区のコースに着いた。8番手で通過していく徳永照選手(同・経3)を撮影した。

さあゴール地点の大手町へ行こう。電車に乗って約1時間30分、東京駅からは大手町へ駆け足だ。大勢の観戦者で歩道は埋め尽くされていた。

歩くこともままならない。ゴール地点の場所取り班と何とか合流できた。その直後、ゴール地点はあまりの混雑ぶりに入場が規制された。

間一髪、ゴール撮影ポイントに潜り込んで安心したのも束の間、今度は中大に異変が起きた。10区を走る多田要選手(同・経4)が足の痛みで失速。シード権はもう厳しい状況に。



町澤選手(当時・法2)

中大は19位に終わった。3年連続でシード権を逃した。これから選手を取材するのか。1年生だった私には、言いようのないやりにくさがあった。

町澤選手に取材を申し込むと、復活への熱い気持ちを語ってくれた。私のやりづらさが消えた。「真面目に固くやっていた4年生だった。来年は4年生の無念を晴らしにここに来なくちゃいけない」。新たな決意を固める町澤選手が、強く私の心に残った。

箱根駅伝の結果は毎年1月第1週に発行する『中大スポーツ』1月号』で紹介している。すぐさま記事を書く、編集作業が始まった。

中学生のころから父親の影響で駅伝ファンになった。いまはランナーを間近で見て、選手に直接話を聞くことができ、夢のような2日間。

取材が立て込み、多忙を極める中スポの活動は一ファンを超えた要素が求められる。大変なこともあるが、選手の一番かっこいい姿を写真と記事で伝える私たちが、選手の一番のファンでありたい。

これこそが選手たちの努力、情熱、結果を伝える一番の方法だと思う。